

正宗白鳥

田山花袋論

田山花袋論



田山花袋氏晩年の長篇「百夜」「恋の殿堂」「残雪」の三種を、私は続けて読んだ。以前は親しみの深かったこの作家の小説にも、近年は遠ざかるようになり、これ等の三大作をも、今度はじめて読んだ訳なのである。このうちの「百夜」は、花袋氏最後の長篇小説であるが、「福岡日日」に連載されたきりで、氏の逝去後二周年を

経過した今日、まだ一卷の書に纏められていないのだから、私は、ある所に保存されていた新聞の切抜を借覧することにした。世に忘れられている作品、埋没されている芸術を、独りで鑑賞しているような興味があつた。一生を通じて創作欲の旺盛であつた作者の最後の作品はどんなものであつたか。思想的に見て、死に近づいて光明を得たのであろうか。心が円熟していたか。萎縮していたか。私は記憶に深く刻まれている花袋氏生前の面貌を思浮かべながら、この長つたらしい小説に現わされている氏の心の動きを見続けた。

「百夜」には、この作者が数十年来取扱って来た人間愛欲の諸相が丹念に描写されているに過ぎないのだ。描写と云うよりも記録と云った方がいいかも知れない。それも、くどい記録である。愚直と云っていいほどに、自分の感想を覆うところなく打明けているので、「もう沢山」だと、読者たる私は、作者の愛欲感に食傷する思いをした。今日の時世に、——政治経済軍事に関して逼迫した現実が渦を巻いて、三勇士や憂国の志士が続出している今日——男女の愛欲を全生命としている小説なんか読んでいると、時代離れしているようである。同じ男女の情

事を書いても、もつと陽気に、もつと美しく、もつと劇的に映画的に、「所謂小説」らしく描いたのでなければ、世上の小説読者に喜ばれないに極っている。私自身にしても、これ等の小説は芸術を欠いているように思った。

「下手だなあ」と思った。花袋氏は、明治文学史に最も巨大な印象を留めた作家であるに関わらず、大多数の作品を残した作家であるに関わらず、最後まで小説道の名人にはなれなかった。三種の大長篇を読んでいるうちに、表現のうまさ感動したところはなかった。朗々誦すべき名文句に接したこともなかった。どの小説にも主要人

物として現われ、「死よりも強く」愛されている女の描写にしても、「ぱっちりした黒瞳勝ちの眼」とか、「白い腕、すき透るような肌」とか、「赤く熟した桃の実のような色をした唇」とか云ったような、形容詞がいつも用いられているだけで、その女の姿形がいきいきと紙上に活躍しているのではない。美しい女の美しさが絵の如く描かれているのではない。芸者生活を描きながらその社会の空気が濃厚に漂っているのでもない。鏡花荷風、或いは里見弴の芸者小説に現われているような色彩は、花袋の小説に於ては全く求め難いのである。昔、氏は、

「要するに私は野暮であつた」と告白して、他の笑いを醸したことがあつたが、氏の作品は終始一貫して野暮つたかつた。芝居の人物で云つたら、氏の役所やくどころは佐野治郎左衛門か縮屋新助であると思われなくてもない。芸者の言葉にしても、洗練された味いは含んでいないで、田舎くさくて粗野である。だが、そういう芸術的欠点に満ちているに関わらず全部が誠実なる人生記録であることに於て、他の作家の芸術を圧しているのだ。「百夜」「恋の殿堂」「残雪」には、氏の一生の愛欲生活のすべてが収められている。氏の文学の集大成と云つていい。「野

の花」や「名張少女」のような可憐な優しい美文小説の境地から一転して、「蒲団」以後の所謂「無技巧の現実暴露」小説に熱中した花袋氏の文壇に於ける働き振りは、明治以来の文学史のうちでは壯觀を呈していたと云つてもいいのだが、しかし、氏の一生の体験を集めた、内容の充実した作品としては氏の名声の盛んであつた頃、氣を負つて書いた幾多の作品よりも、晩年の「百夜」などの、記録的長篇を推すべきだと思われる。ここには、愛欲の陰影がいろいろに現われている上に、当人以外に子女の恋愛のもつれが起つているので、人生が複雑になつ

ている。この作者が自分の子供の情事についても遠慮なく解剖のメスを揮わんとしたのは、主義に忠実なる訳であるが、それは十分に功を奏してはいない。功を奏してはいないが、作者——小説中の主人公——の心の悩み、生存上の葛藤が二重にも三重にも面倒になっていくことが分つて、私にも生きた人間の世の知識が与えられるのである。世上の多くの家庭、多くの人々の生活の実相を暴露したら、この作者の心と共通したものが案外多いのではあるまいか。従つて、これ等の小説は世離れした閑文字であるどころか、我々の現実生活に肉迫した分子に

富んでいるのである。私は読みながら、絶えず自分や自分の周囲を顧みた。

「百夜」は、島田と名づけられた主人公とともに、悲喜哀歡を続けて来た芸者お銀が、鏡に映るおのが姿に老いの影の差して来たのを感じ、男の気休めの言葉なんか耳にも掛けず、「自分が何だかちよつとも知らずに、ただそういうものだから、そうして通って来たと云うより外、何もなしに盲目でやって来たようなものですね」と、おのが一生を回顧するところからはじまっている。彼女は震災で無一物になったのを男に助けられて、郊外に借家

をして、両親と微かな暮しを立てている。島田はそこへ通っている。彼れ島田は、震災の三日目に女の身の上が案じられて、火のまだ燃えている中を、やっとのことで、大川の橋杭の上を伝わって危険を冒して女の行衛を捜し、十時間も川水に浸っていたにも拘わらず、どうにか命だけは助かって、浴衣がけで震えていた彼女を見つけ、互いに涙の対面をしたのであって、二人の仲は並大抵の仲ではなかった。そういう関係の女の所へ人目を避けて通って行く男の幸福は、昔から詩に唄われ、絵に描かれ、中本仕立の小説に述べられて、私などもその境地

を想像しては羨望するのであるが、島田対お銀の実際は、

「椿姫」や「マノンレスコ」や、春水や鏡花の小説にあるような場景の現実化ではなかった。持って生まれた美貌もシミや皺に腐蝕されだした女と、白髪のお翁との情事であるから絵に描いてもあまり美しくはない。序を追うて起る島田老人の感想には、現実の経験から生み出されたものであって、現実によつて裏打ちされた恋愛哲学、人生哲学と云つたようなものが現わされている。田山氏は、素質が乏しかつたためか、自己の経験自己の夢想を渾然たる芸術として表現し得なかつたが、誠実と根気と

体力とによつて、自己の感得したものを、兎に角文字を
通じて現わすことを得た。「彼れも自分達の恋愛の総決
算がいつかは一度必ずやつて来ることを思わずにはいら
れなかつた。敢て古い歴史を持ち出すまでもない。今現
にそこにもここにもそうした恋の址がある。……何どんなに
しつかり、心と心とを合せていたとて、その址になる時
は屹度来る。そうして見ると、恋というものは火花を散
らす時だけのものか。その時だけを尊重して、あとは金
屑として捨てて、捨て去るべきものか。……執着ならま
だ好いけれども、それを通り越して、一つの習慣という

ものになりつつあるのではないか」と反省したり、「彼
れは平生、金は単に金だとは思ってはいなかった。金は
すなわち心だ。男が女に対してその心をあらわす唯一の
ものだ」と痛感したり、ついに「恋と死」というところ
まで達している。大抵は中途半端な所で留っているから
いいようなものの、恋愛も徹底すると、「死」と結びつ
かなければならないのであろう。その究極の境地を、田
山氏は、最後の長篇「百夜」に於て、いろいろに手を尽
くして描こうとした。描写の筆は硬張って自在に動き得
なかったが、恋の究極を表現しようとしたのは事実

だ。「若い時には、この恋と死とが画然と二つにわかれて
いた。恋は恋、死は死という風に考えられていた。そ
れが中年になればなるほど、次第にその離れていたもの
が近寄って来て、今ではその二つの問題がぴたりとひと
つになって、彼れの前に現われた。」「……十年前にあ
っては、死はまだ一つの空想であり、ひとつの幻影であ
り、またひとつの思想であつたけれども、今ではもはや
そう間接なものではあり得なくなつた」と云っているの
は、愚かな情痴の現われとして蔑視すべきものではない
かも知れない。完全に相手を所有するためには、「恋愛

を墓場の向こうまで持っていかなければならない。」田山氏の自然主義的恋愛も、ついに中世紀風の宗教味を帯びて来ていたのに、私は興味を覚えた。「二にして一、一にして二」は氏がいろいろな場合に云っている生存のモットーである。女の魂を完全に掴むことの困難を氏は屢々嘆息しているが、氏の人生生存の第一義的意義は、女人の魂の完全なる掴保に在るので、ダンテやゲーテの「永遠なる女性」も要するにそれなのである。ところで、私自身は魂と魂の融和ということなんかについて、あまり心を労したことがないので、ダンテやゲーテや田山氏

などの女人礼拝の心境については暗中模索をしているに過ぎないのだが、しかし、銀座漫歩の人々にも、ラッシユアワ―の群衆にも、日常生活の雑多粉々の表面的事件を除いて、核心をのぞいて見たら、そこには何等かの形で、女人礼拝の面影が存しているのに気づくであろう。日本の男子は今なおスパルタ的道念を尊んでいるため、女人礼拝を斥けているらしい顔しているが、実際は女人を中心に、産めよ殖えよ愛せよの生存律の下に活動し、そのためにさまざまな社会生活苦を嘗めているのだ。「百夜」の中で、作者は述懐している。「あまりに情痴過ぎ

るかも知れないが、かれの経て来た五十年の生活の中では、それより以外には大したものがあったとは思えないのであった。金を稼ぐこと、自分の名を世間にひろげること、別な反対な勢力と相争うこと、生活状態を一步步々好くして行くこと、そういうこともこの世に生きて行く上に於ては、かなりに関心ではいられないことには相違なかったが、それも一方に彼女があるからで、若し彼女が彼れの生活の途上現われて来ていなかっただら、その生活力も決してそう強くは働かなかったに相違ないのであった」と断言している。

「百夜」の中の島田は、「恋の殿堂」に於ては、父親としてその娘と論争して真情を吐露している。

「しかし、親は子のためばかりこの世の中に存在しているのではないよ。親だって、子にわからない苦しみをするよ。子のためにならないことでもやめられないこともあるよ。ある……」

「それはそうでしょうけれども。……そういう個人的な心の境は、父さんなんかはもうとうに通り越して来ている筈だと思うのです。もっと先まで行って下さらなければならぬ筈だと思うのです……」

「ところが通り越して来ていなんだ。昔の通りなんだ。

……お前などにはまだ分るまいが、この年までおれは異性のうちに恋を求めて、一つとしてその恋を本当に擱んだためしがないのだ。そして、そういう風にして恋愛放浪をやっているうちに、いつか年は遠慮なく経って行って、もう髪は白くなる、額は皺で満たされる、そうでなくてさえ駄目なやつが一層駄目になる。そして、お前などからは、年を取ったという唯一つの理由で、そういうことは人間のやることでないように非難される。しかし、政子。この父親だって、若い人達と少しも変ってはいわ

しないのだ。熱い血が燃えているのだ。それでいて、もう誰にも相手にされないので。この間もつくづくそれを痛感した」

こういうことを感じているのは、彼れが特殊な人物であるためではないと思う。公言するかしないかの相違で、多くの人びとがひそかに感じていることではないだろうか。

「幸福なんて、一生金の草鞋でぐるぐる廻って探して歩いたって、とても見付からないものかも知れないのね」

田山氏に多数の小説の題材たる経験を与えた女をして、彼女の一生の結論みたいになんかことを云わせ、作

者をしてメーテルリンクの「青い鳥」を思い出させているが、私が、この作者の晩年の三大長篇を通読して、特に心に留まったのは、作者の空想の楽みと宗教的陶醉とである。これ等の小説の主人公は、さまざまな障碍はあっても、愛人に会っては生甲斐のある悦樂を覚えていたのであるが、しかし、女を目標としてさまざまな空想を逞しくしているところに、却って純粹の悦樂があつたのではないかと思われる。「蒲団」以前、すなわち、「名張乙女」や「野の花」時代と同様の女人憧憬の空想が、六十歳近い作者の頭脳に漂っているのだ。老人となると、

頭脳が枯渇して空想の華が萎むと、一般には思われていて、私などもそう信じていたが、これ等の小説で見ると少女にあこがれて詩を作っていた時分と同様に、独りで恋の境地を空想してホクホク喜んでいるのだ。現実々と云っても、空想の領分は広く、且つ人間に取って重い価値を有っていることは、これによっても察せられる。そして、田山氏だけが特殊な老人であつたためではなく、多くの老人が、皺や白髪に外形の衰えは見せながらも、恋愛その他について、二た昔も三昔も前のたわいのない空想を有っているのではあるまいか。……それは嗤い事

ではない。

宗教についてもそうだ。「残雪」は、この作者が恋愛から宗教に移った経路を書いたもので、他の小説とはいくらか趣を異にしている面白のであるが、しかし、これを読んで、作者が本当に悟道の域に入りきったと思ったら大間違いである。

作者は、田舎の寺で、偶然経文を読んで、大いに感激し、人生の帰趨をそこに見たので、「……いろいろなことを知った。解けない問題をどのくらい解いて貰ったかわからない。……この間もすっかり打たれてしまって、こ

れからの残った一生を仏の功德に報いても、決して悔い
ないとするら思ったからね。僕の経て来た艱難は、丁度海
綿か何かの中に吸込まれたように、すっかり吸込まれて
行つたからね。……こうした大歡喜を受けた得難い経験
を僕は世間にも分けてやりたいとつくづく思ったね」と
興奮して云い、「心は輝き光明と安樂とに満たされた。
かれはもう帰って行く都會を呪いはしなかつた。事業の
はかなく功名の空しいのを嘆きはしなかつた。またかれ
が住んでゐる芸術の世界の陷穽を恐れはしなかつた。人
生の欺騙ぎへん乃至虚偽にも多くの心を費やさなかつた。かれ

は再び青年に戻ったような気がした。日影は明らかに庫裡のひろい勝手にさし込んで来た。雀はその生を楽んで嬉々として百轉した」と歓喜の感を述べ、「さびしい、しかし春を予想した冬の野が潤くかれの前に展けた」と、意味ありげな句をもつて、一篇の小説を結んでいる。

だが、こういう豊かな宗教感も、多分の感傷味を有つた一時の気休めに過ぎなかつたことは、「残雪」のあとで書かれた「恋の殿堂」と、「百夜」の主人公とが旧態依然として、悟道の人らしいところの少しも見られないのによつて、明かに推察せられるのである。人は境遇に

より、或いは修養により、次第に変化するには違いないが、根本的の烈しい変化は滅多にあり得ないのである。それは、他人のことよりも、自己を反省してよく分かるのだ。田山氏の如きは、文学の上で非常な飛躍を試みた人であったが、それにかかわらず「名張乙女」「野の花」の気持は、最終の長篇「百夜」まで続いている。むしろ「百夜」には、初期の作品への還元が見られるのだ。

「だって、君、人生にそれより他に何かあるかね。事業とか名誉とか、そういうものも一時は大きなものであることはあり得るさ。しかしそういうことは雪か霧のよう

なものだからな。忽ち消えてなくなるからな。ところが男女のことはそうは行かない。死ぬまでくつついて来ている。人間は墓穴までその心を運んで行く」と、作者は屢々そういう感慨を洩らしているが、田山氏自身忠実に墓穴までその心を運んで行ったのだ。

「残雪」には、女主人公が、同じ稼業の女と、ある男を争って敗れたため、刃物三昧をして、投身自殺を企てたことが書かれているが、そのために彼女が死生の境に彷徨しているのを慰藉し愛撫して、決して彼女に愛想を尽かさない男主人公の純情が仔細に述べられていて、

我々読者に作者の面目を偲ばせるのである。三種の長篇のうちでも、このあたりが最も小説的興味に富んでいて、この作者の真心が最もよく現われている。これに続いて、例の宗教感菩提心の発作が書かれているのは、心理的に当然の順序であろう。



五月十三日の夜。私は、まだこれ等の長篇に目を触れない前に、麻布の龍土軒で開かれた田山氏の三回忌――

すなわち逝去後満二年を期した追悼会に出席した。旧くから仏蘭西料理を看板にしていたこの洋食屋へは、十数年來行つたことがなかつたが、その家は昔のまま現代化した東京にこんな所があるのかと思われるような古色蒼然たるもので、仏蘭西で見た十八世紀の料理屋を思い出させた。そして、我々の目には、昔の記憶が浮んで、由緒のある歴史の跡を吊うような気がした。追悼会の來会者にも、文壇の新人は一人も加わっていなくつて、自然主義文学凋落の影がそこに見られるようで、追悼会はますます濃かであつた。私などが文壇に出た頃、「龍土

会」と名づけられた、新進気鋭の文学者の会合が、この龍土軒を会場として、毎月催されていて、知名の自然主義の作家は多くその会員であった。私は龍土会が盛りを越した頃に加わったのであったが、國木田、小山内、岩野、蒲原、中澤などの諸氏が、元気のいい声で、議論を闘わし、饒舌を弄していたことが、私の記憶に明治文学史の一現象として、鮮かに刻まれている。田山、島崎氏も無論会員であったが、どちらもおとなしかった。

田山氏は、あの頃の作家仲間では、やはり巨大な作家であったと、私は今思っている。他の誰彼れに比べて、

氏は凡庸であるらしく見えるが、凡庸を押し進めて行つて、才智を弄しないところに、巨大な作家の風貌がおのずからあらわれていると云つていい。

「恋の殿堂」などに描かれている若い男女の恋愛は、老いたる主人公自身の恋愛の描写に比べると、甚だ粗末であつて生彩を欠いているし、老主人公が青年少女の情事に対する態度も随分身勝手であると云つていいのだが、ここに、この作者の主張していた客観的態度が、作品の上には充分に実現していないことが証明されるのだ。「露骨なる描写」は試みられていても、この作者のよく云つ

ていた「鋭いメス」はそんなに動いていないのだ。藤村・秋聲・泡鳴・蘆花などの諸氏が、皆んな自叙伝風の小説を作り出し、それ等の多くは、それぞれに一くせある感じがするが、田山氏のは凡庸で、芸術家らしい綾がない。経験や感想を、べたべた書きつづけたもので、経験さえあつたら、誰にでも書けそうに思われる。しかし、これを凡庸と思うのが、我等が、自分等の文学標準に捉えられているためなので、凡庸丸出しのところなまなかに生中の非凡以上の偉大さを認めなければならぬのかも知れない。

今読んだら稚拙凡庸の作品と思われるだろうが、「蒲

団」は、何と云っても、明治文学史上の画期的の小説であるのだ。追悼会の席上で森田草平氏は、昔田山氏の誤訳が問題となったことを語っていたが、田山氏の翻訳に間違いがあったばかりでなく、「西花余香」と題された欧州近代文学読後感、その他、自然主義の中心人物となった以後の、東西文学批評や解釈なども、決して的確であるとは云えないので、自己流の早合点が多かつた。先日ある会で日本の山水美の話が出た時、某氏が田山氏の旅行記には事実の相違が多く、信用が出来ないと非難していた。しかし、田山氏は西洋文学を曲りなりにも読ん

で、自分自身で解釈したところによって、自分の創作態度を改めようとし、「蒲団」のような、他人の物笑いになりそうなものをも、自分でそれを是なりと思ったが故に、断然として創作した。「僕は昔から比較的正直に世間に生きて来た。誠実を失わずにやって来た。言わば丸はだかで刀槍の林立する中を通って来た」と、「恋の殿堂」の、宗教陶醉時分に云っている。文学の上の氏の革命態度は、氏自身の作品を根本から異ったものにはなし得なかったが、他の文学者に及ぼした影響は甚大であった。花袋流の自然主義が流行して文壇を賑わしたのだ。

賛成者でも反対者でも、盛んに自分々々の「蒲団」を書きだし、自分の恋愛沙汰色欲煩惱を覆うところなく直写するのが、文学の本道である如く思われていた。機運が熟していたためであろうが、その傾向に火をつけたのは田山氏であった。私には、田山氏があんな創作やあんな文学観を発表しなかつたら、自伝小説や自己告白小説があればほど盛んに、明治末期から大正を通じて、あるいは今日までも、現われなかつたであろうと思われてならない。その証拠には、龍土会会員で西洋近代文学を耽読していた者は、少なくなかつたが、田山氏以前に、自己の

実生活描写を小説の本道であると解釈したものは一人もなかつた。島崎氏は、田山氏の「蒲団」以前に「旧主人」を書き、「水彩画家」を書き、「並木」を書き、自己の左右に小説のモデルを求めて、その真実を写さんと志していたらしく、子規一派の写生文も小説に事実直写の端をひらいたものと云えないことはないが、しかし、それ等は田山氏の自己暴露の自然主義とは余程異っている。西洋の自然主義文学は、客観的分子に富んだ文学で、花袋氏の独断にかかる自己の日常生活直写とは異っている。西洋の評論家の定義によると、自然主義は写実主義

の度の強いものを云うのだそうだが、花袋流に自分の生涯の打明話しをするのはその本領ではなかった。田山氏も模範としていたゴンクール、「ジャーミナルラセルトウ」は、作者が叔母の家の下碑をモデルとして、事実をそのままを写し取ったと、自分で自慢していたもので、自然主義小説の最上の見本とされているが、それにさえ、批評家の研究によると、幾多の作為の痕はあるそうだ。しかし、それは止むを得ないことで、出来る限り「真実を描くこと」「有るがままに描くこと」を目差すのは、創作態度として甚だよろしきを得ているのだ。この態度

を田山氏が欧州の近代文学から学んだのはいい。しかし、自己の生活を無技巧の筆でぶちまけるのを文学の正道のようと思ったのは、当を得たとは思われない。

田山氏の提出した小説作法は、創作を容易なものと思わせた。作家が自己の心を開いて、自由に自己を語るのは、旧套を打破するにはいいことだが、想像力が萎縮し眼界が狭小になり、単調になるのを免かれなかつた。オーガスチンの懺悔録は作り物語よりも読み応えがする。ゲーテの自叙伝は彼の戯曲や小説以上に面白い。一葉の日記もその小説に劣らない妙味を有っている。パシカツ

トセエツフ女史の日録も極めて面白い。普通人の心覚えの日記だって、生中なまなかの小説よりも興味があり有益である。しかし、純粹の戯曲や小説は日記以外自伝以外の魅力を保っている筈だ。凡人の日記や自伝がすなわち芸術であるとは云えない。私なども、田山氏の感化に毒せられ、易きにつき、日記小説みたいなものを濫作して来た。創作の才能が乏しいから止むを得なかったのだが、私以外にも、そういう作品の多かったことを、私は回顧してむしろ呆れている。どんな作風でもいい者はいいのだが、凡人が何の変哲もない自分の生活を書いてそれで芸術だ

と思っっているのに同感はされない。実録なら実名を用いたらよさそうなのに、自分や妻子や友人の名前だけを、小説的仮名に変更するのも嫌味である。今度読んだ三長篇にも、主人公やその相手の女やその他の人物の名前が、三篇ともそれぞれに異っているが、読者たる私は、同じ男女だと思っつて読むのだ。主人公をも作者と異名同人であると思っつて読むのだ。兎に角小説として発表されているので、全部が実録でないかも知れない——たとえば「恋の殿堂」の終りで、主人公が田舎で袋叩きにされて死んでいるのは、無論作り事であるが——読者がすべてを實

録として鑑賞するのは当然なので、そういう読者の態度を、田山氏としても非難することは出来ない。氏自身の文学観はそういう鑑賞態度を取らせるように仕組まれていたのである。作者の私生活についてのゴシップ興味が読者が唆されるのも止むを得ないのだ。田山氏は、傑れた小説は、作者の手を離れて空間に存在するものであると云っていたが、氏の実録小説は、まだ作者の手を離れきってはいないのである。「木切れ一つなく裸体のままで浴室で殺された源義朝の悲痛な生涯」に、田山氏は自己を発見して、一篇の歴史小説を創作したのであったが、

それは、島崎氏の「夜明け前」に比べると、遙かに主観的であり、独断的である。しかし、作者の心境はよく分る。この「源頼朝」出版記念会が田端で開かれた時に、作者が、「僕が文壇的に衰えたために、諸君が同情してこの会を開いてくれた」と、感傷的に云ったことを私は記憶に刻んでいるが、文壇、家庭、恋愛などで悲痛な思いに迫られている作者の心が、「源頼朝」に現われているのが、我々の心を惹くのである。三篇の長篇も、その気持を畳みかけ畳みかけ出したものに外ならない。そして、田山花袋一生の文学は、要するに人間に希望を与え

るものではなかった。

この頃、一部の若き文学者が明治時代の自然主義の研究を試み、ゾラのリアリズムの研究にも及んでいるらしく、かつて読売新聞に、阿部知二氏は「自然主義の運動全体が今までの文学の流れのうちで、最もすぐれたものではなかったか。あそこには観念的な服装としてではなく、真に人生に対した意味での思想があった。同時にもつとも歪曲されないところの芸術の熱があった」と云っている。これは間違った観察ではないようだが、私などが、田山氏の遺稿を読みながら回顧すると、当時の新し

い作家の意気込みは盛んであり、態度もよかったとしても、素質の傑れた作家、力に富んだ作家がなかったためか、いつまで経っても光の失せないような作品は現われなかったように思われる。

だが、この頃のいろいろな方面の新しい作家の小説が、どれも読み応えがしないとすると、過去に遡り、自然派の文学でも新たに研究して見ようかと考え出すのも当然のことかも知れない。花袋・泡鳴・秋聲・藤村の四氏を比較研究すると、日本特有の自然主義の妙所も弱点も明瞭になり、将来の文学に対して何かの参考にはなるだろ

う。これ等四氏は自然主義の代表的作家であるが、各々面目を異にしているので、今の青年批評家なんかが概括的に見ているのは間違いなのだ。花袋・藤村の相違は、藤村と漱石との相違よりも甚だしいと云っている。

だが、今の私は過去の自然主義文学には飽き果てている。少なくとも私自身の初期の小説なんかは消えて無くなれと思っている。(昭和七年六月)

日本文学電子図書館

田山花袋論

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「文壇人物評論」中央公論社

1932年7月20日印刷

1932年7月25日発行

日本文学電子図書館